特 1
2572

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

百千鳥序

予荘年乃比より小説を好く事を
ものせし人幾しく田舎に
とのりてゆの徒ものりに仏かやうに
おもふ者ゝと仰ぎ奉り筆中か入
の心ばへのうつくしき事乃やいさぞのもし
源氏唐土路を敷ちとも色んとをひ書
し格ゝ夢ゝ若ゝこの夢ゝ物の語か花さん

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

特1—2572

三さと同ぶつ[illegible]きを知[illegible]
ひるぐ[illegible]手蓋曰地名ハ[illegible]
かもめし一つの名も鶴毎乃翁を結び
生る時ハ未毛毛柚の名ハ心と庸む業ゆ
きさせハ[illegible]の若[illegible]柿同名乃徒[illegible]
川ハ名風ハ記[illegible]ハ名[illegible]をめ長日の追屋
を数[illegible]地蓋乃[illegible]を[illegible]
性の癖上[illegible]移を吟[illegible]ハ待歌の種

を求めいさぐ[illegible]ハ猿ハ[illegible]乃毫を[illegible]定
下の言ハ略の時[illegible]語[illegible]同名
もかるハ同し命をもむ[illegible]を救んを
[illegible]一冊を綴[illegible]奴

ハ時同[illegible]方を[illegible]高名乃蓋を[illegible]
奴人の一恥[illegible]ん[illegible]則[illegible]
機未ハ[illegible]嘯[illegible]

をよそのうぐいすはせぬ生花はなの歌仙
のうぐいす　四條　しの俳を立て
歌撰集をくべきうぐいす

寛政十一未秋

泉花堂三蝶述

百千鳥目録

巻の初挽句のうぐいす
下俳巻八方のうぐいす
捻俳撰句のうぐいす
春歌附のうぐいす
獨吟句文句のうぐいす
凡切句のうぐいす
異講のうぐいす

上巻の部金句のうぐいす
捻俳巻末のうぐいす
歌仙のうぐいす
連句のうぐいす
眼乃句のうぐいす
俳離のうぐいす

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572　ガラス使用

細毛虫の図
一切怪物の図
蚕の図
朝三蚕の図
蛍飛の図
虫の図
蛍の図
蛍出の図
蛍籠の図
蛍と月の図
上二十七箇

米乃粉掛れの図

米一升かしは糠三升二合をまぜそじめ
米を燻竹色かゝるまで香色
かゝるまで米を上ケ来て
米をとり入れ後かしは糠を八分ばかり
集り紙かゝる中を
くかきまぜくべし
ふべし米糠の割さ
かしは糠別

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

をよしらるべし

上香粉の合紙のしな

米一升 糠二升 白大豆一合 大麦四合

谷煎くまぜ換べし 煎かげんハ和のごとし

此粉ハ蜜漬セツカセンニウ小ヨシひごとこれ

ようきこなかきくべし 如常香ばしきかどふと

よし

下味考ふる方のしな

右まハ鰻をまかつるひしし 当時ハ一流鮒

をつふるるうなぎハつるるなしく鮒ハ

油ひうろ〳〵麻香鮒ハ和こちいさく

油をかしまかのまあかの志し中鮒を

よしこうと麻香鮒も雑香ふハ

こうこうこと又たゞこと下味を乾ハ鮒

のまと上香ふハつうふべこうこと又海魚鰻のる

いハこうこと上香ふ考ひてもこうこうべ

又ときゝ伝へし云魚を鮠(ハヤ)小魚(ハヤ)なるもの中より下の方小ふなゝ赤腹(アカハラ)ふなゝ魚ゝ近(サン)江(ヘン)相州の辺須(スム)賀(カ)川(ヤマカワ)の早瀬(ハヤセ)小魚(ハヤ)を下酒小肴ふさゝ立(サイ)山川の早瀬小魚を下酒小肴ふさゝ

何にしても鮠(ハヤ)小ふなゝものかし鮠ハ冬夏の写らく

写ハ沢山之写小ふなゝ冬夏の写らく

ふくらへ鮠(ハヤ)ぶつ切日小ふなゝ夏の肉ハ

筍の中へまぶしを入のまゝ入れく

べし虫(ムシ)つくもの

拵肴を味のもの

菜(ナ)を煮(ニ)ものハ人の好不好

ふくらへ鮠(メチ)ハ怒(ヌ)ケし安し写中(ナカ)ハ幕(オウキ)の実生(ミセウ)

を沢山(タクサン)小椎茸(シイタケ)菜の代(カハ)りにべし大蒜

も莖(クキ)ともに出るものゝ小ばくきとさゝく

蒜(ヒル)を搗くゝ椎茸(コウシヨ)の茎(セウ)ハ幕なても

出安しとする肴を食(クワ)もし上者乃

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

るいハ忽牌おもむくことの〻為(エカ)にあるとなふ二度
でもうくるも筆の墨ハ薬ちうまつ
ちかぶん〻〻入べ〻〻万一筆の墨おき
時ハうぐ〻〻の墨ようてもすこしもうし
もくもうくるハ〻〻〻〻後墨ハ〻〻〻〻
〻〻〻〻

一辨摺餅の名ハ水を入るハ不及あら
ひとゝ墨ハ白ハ日しく水を用ふべし
秋ハくゝとハ入ふ又栗糀をこ酒ホを
咬ふ名ハ四季ゝとハ水をとゝやさび用ふべ
し摺餅ハ名ハうゝ咽うゝ粒餅
ハ水をゆしハ咽乾き名ることゝ

附のゝ

諸名いづれも七月末ハ九月へうけゝ羽ぬけ

かゝうゝ新ハ也附ハ今を
五下の下餅うゝ咽しハ名ハ名ハ
咽ふべし余りつゝくしてハ行ゝ下餅強
く咽ハ羽ちし是いゝ又ハ目を換び
雪弱名ハ名ハ附入内四文ハ名ハ名ハ虫
といふものと咬ハ名ハ虫田舎ハ名ハし
かま名ハ名ハ名ハのつゝふ生ハ虫ハ小名
ふ和くゝし去りしハ名ハ雪ハ名ハ附和ハ

蒼ましばおく樹かり音とめるものく
又合つるべし

水を浴するの

冬春の間ハ二日ハ一度ゆるゆるで浴くよ暖
きやうしバ日〳〵ゆるも苦しゆえ水を
りしバ毒ゆえ己ゆ病をまぬ是ゆう
くい日ハ度々も浴くよう節ゆ〳〵ひびを
く蒼へうけまべしハ落るを

乃ちう

腸腫ゆのの

年久〳〵綱含るハ腸搔〳〵ゆ腸ハ皮を
かき除腸太くなりゆくゆ自然と足のいゆを
るゆるうまて玉ハ腐ハ足をそこのふよく
水をつぶやく竹のゆをゆ〳〵腸の
皮へきゆ入れそうゆくとえびべし腸
のるふしるものく筆のうきとうく

生を繼しがしく成ぬ年久しく成
ぬとかぎりなき二三ケ年も風ふ時ハ瞞侍を
生じ種ものハひきこのゐるまゝの指ふ
ものゝ少く瞞侍かしゝ蕨の内ハ風
しゝもう木を結ひ蕨の風ものゝ
ふ出るこのゝ

足腫のゝ

熱腫風毒ハまゝ足腫出るこのゝ下腫脹

ば足を切ふゝもう木ふ搗腫こびつきこの上
へゝもるゆへふ足を換ひ形ゝ生木をゝ
くゝゝ煮ふ麓のゝ木を用ひ
かき木ハ行ゝゝ用きにゝとゝき木乃
ゝいゝ別ゝ昔木ゝ搗ゝ木も節の
ゝきふを用ひ片ゝハ細ゝ片ゝハ
ゝゝゝゝ掛へ財ゝハ
風切法のゝ

籠中にて爪先を切るべし

鳥の目へ引掛て水を

溜るべし 切べし 余り強く切

ば血出て痛を生じ表より表の方

切るべし

眼の病乃

眼かすみ 眼ハ左右にあり

〜今にもかすみ 早く毒墨の古

を〜搗〜表眼に ぬるべし 雲〜

泉水ひしの 鴨 鶏 水かつ〜自然〜渇

生じ小さるもの 表眼に毒墨

糞 詰りの

糞詰り〜尾を上げ〜振るとの〜見 小ハ蛞

の腐るを 粉〜水ふるべて 表

先をぼレイ〜ふ 薬種屋にとる

ぞうすいとして通ぜざし小口紅とき
く用ゆべし玄摺膃肭の上へぬぐべし後
中の熱るをうくるゆへく

膃肭の

膃肭の離くは背別く赤紫駒
多小翠雀むしくはるし安し赤紫弱多
赤玄明の玄とうくおきく絶く膃肭
丈く忽咳つくるものくは玄明はるし小さ紅

を用べし玄明又連雀も膃肭
るし安し茗椒水をうくる呑せ摺
膃肭をうくるし

細強虫の

多の背小付く細強しふ虫の歌紅く
少く丈白く羽虫の小しは一ツのるきは一
夜ふ一く忽羽の莖うり脱く咳そし
く鶯ふこうる蓑るるものく蚊虫付古ふし

一とせ鷹の鼻乃中ゝらき出ゝ今も小
鷹ふつゝゝゝく鷹の鼻乃中ゝらきら
ゝハ食ゝゝる鷹の嗅る鼻乃間ふ入ゝと
き出ゝるものゝしハ小鷹もゝ鼻ふ間ゝ蕨
の掃除ふゝゝ糞中ゝらゝゝゝ虫
ハ中ゝ汚きゝゝゝは蕨ハ間鷹秘法乃
名蕨ゝしゝゝと好人のゝふふ蕨ゝとの
ゝ蕨の蕨を蕨ゝゝ陰ふ時ハ忽ふ去

て溺れゝゝ蕨ゝ蕨ゝ蕨を
も陰ふゝゝ一つも殺ゝる秋ふ白ゝ
蕨を蕨ゝゝ陰干ゝゝゝ冬春
の内ゝ陰ゝる時のゝゝ

蕨 仕立のゝゝ

蕨ハいゝゝと叮嚀ふ梅ゝゝゝの桶ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝハ飛を入ゝ足と換
ゝ夜中ゝどさゝぐ時陰ゝゝゝを

奥行を深くして尾羽を換ずん

怪鳥の事

蓑の目をかすめ怪鳥の猛鷹
を見るなり蓑をすかす見ハ人骨破焦風
のごとく底口より風入て猛るゑおく竹
乃筧なり突破し風出て枝をもるなり
突然ハ横行なりかもべし直ハ突くハ
又是猛鳥ハ鉄炮をもうして償るの報をか

しく入て触れ玉蔵くし痛む是へ生ぜ
夫そも治せざる時ハ松茸おとりてもんば
性ふべし松茸といふハ臭ひ生る毒地ふ
這生ずして松ふ似るゆえ毒二日ハ過
ひて怨恨夏の肉ハ腐ずあり
玉へし冬ハ引き茸又仰ふ
元るゆきハ人参をもんば呑べし
むるさまハ一切の病ハ

玄蕃の黒焼を水ふくめて用べし大妙薬
なり是乃形ふハ黄柏の粉をぬるべ
柳の皮ぬるべ也ぬるべ也ぬるべ也
ハ一ぬんぬしぬも又痛出るものなり
羽虫多きハ紙袋をこしらへ灰の如る
ぬぐ穴を咽けるの灰を袋ぬるべ出
ぬぬ多蒸鍋の煙ぬぬ三四度もいぶ
ぬぬぬぬぬぬぬハ小毒ありぬ

灰を袋ぬるべ出ぬぬぬ
ぬぬ毒を出ぬ毒ハあるべ
ぬぬぬぬ多ハ中一多
ぬぬ鍋の脂をいむべ又ハ小毒のぬ
ぬぬ痛出ぬぬぬと更ぬぬ

子ぬ虫の事

一瓣小毒ぬハ子ぬく虫ぬ一の薬ぬ
毒腫ぬ又ハ痛毒ぬぬぬ

鶏蒙話

春おそく咲の花ふかく雪の詩
ゑ春の餘ふ夏ゆく秋ハ行山
くれをおもりてハ秋ゆくものゆへ
水ゆく行をんもひ水ゆくゆく
ゆいのくゆくゆくたゆべし遠
くふゆゆび天水梅どふなるゆ
きゆく虫とゆゆゆゆゆ蚊ふゆる虫く

冬蟲　のゆ

冬蟲とゆふ虫ハ田ゆ生ひ蛍村ゆふれた
稲ゆゆゆゆ虫ハ虫をとゆふ旭の
ゆゆゆ生ざる肉ゆしがゆゆゆゆゆゆ
切ゆ熱湯ふ入ゆ穀ゆ干ゆ夏四又ハ
紙袋へ入干ゆもゆ蛍ゆ生
ゆゆゆゆふ夏ゆの蟬ふ蟬半ゆゆ
ゆゆ更ゆ夏四ゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ春蟬ゆの時又春ふ入ゆ一蟬

多ハ隆ら人足ちげきめ〳〵おくぐし自然とお
ぐしくもの〳〵鉛ハまくおうて夕うハつまう音
ぎう肉ふ赤もめ〳〵夜の肉ハ日ふ赤ぐ〳〵
脾を赤〳〵よ〳〵赤ひ〳〵ふ薬ふ水を分て
ゆるめく咎ひべし

羽変のう

羽変りうふハ白く変又ハ横色うと変
うくハめ人の羽うしかしづ〳〵白くもう蘭ひ

ダイ
ゆふ白〳〵爪も白くもう時ハ赤の羽変〳〵〳〵
後ふ一面乃白ふかるうものくハ角爪へ〳〵〳〵
白〳〵もう〳〵ぶしふ赤の変りうふ〳〵ふ〳〵風切の
羽又ハ脊中尾〳〵白〳〵もう〳〵ハ蘭羽
〳〵〳〵〳〵の蘭〳〵ふ〳〵〳〵〳〵

かとうるるものハ白鶴のるいかえ
まのふぐるるても貴きべきかのびゝ柳
いこどる花ハ紅るるうるの相色よし
ふぐるるの者ハ弱〳〵絶命ひるるものゝ
樓木のいき業のごゝ

本朝三者のるる

嘗弱者翠者ハ三者を日本の名者と称
〳〵和者百者の上品く

嘗百仕三のるる

嘗ハ黄〳〵相色もの〳〵称ど多のよく詩歌小
鳥〳〵ら寺寺〳〵和尚あ尚書とゝ呼
ん級小帝ゝ者〳〵と云る又法ゝ英雄を称る
ゆゑ小強ゝ者〳〵と武ハ和〳〵ゝ〳〵いゝ
百鳥の肉小和音ゝ〳〵人〳〵貴ん
ゝゝ百者の絵一ゝ〳〵むゝゝゝ〳〵る
るゝ〳〵鉄中迫法信ゝ〳〵絶釈者と考

こゝ分るゝとゝ書く雛は毫〻云〻一番の
巣を中〻こゝに三月中旬より巣をけら一番
乃巣ゝは雄多〻〻〻〻は巣の内五羽いるゝば
三四羽は雄と二番をは雄多〻〻三番四番未の
かゝしは雌かちゝ雄かし未のゝはゝ弱
く五月末六月比も產ゆへかゝ狩の音へ
弟か成〻〻笑る号かし一番のゝ白ゝは二月
末三月初ゝ出るゆへかゝ狩の音をゝるゝ久しく

こゝ上毫丈〻〻〻夢大きゝ未のゝはゝ
いくゝ〻嘗の廻り黄色なるゝ白くゝ〻〻蜂
巣のゝ育かゝ〻志ゝしゝ比時ゝゝ出を
甫四しゝ嘗の白ゝ黄色かゝ〻〻育ゝのゝ
巣のゝはゝ網かくきゝふくゝ〻弱きゝのゝは
いゝゝ蜂網を高いゝきゆへゝ蜂網
蜂かゝきゝ比ゝ日〻〻三度ゝ〻音水を
吹くゝ〻おゝくゝ吹ゝゝゝるの内は交ゝ

水を沸かしたる湯にかの鶏の
の肉ハ別して細長夕〻に薄を取べし
初めて時ハ十羽が十羽共ふ達ちふ云月日秘する
ハ美ふまり毛ひく者ものハ秘するかした
婦人のもめく孵ひたるの者の巣ハ人の知るか
すしハ記さび先巣の肉をとくいまぐ裸るか
らハ忘べ〻び又四五日をとくえべし和のもと遠
ひよく羽を生びるゆへ油ひたしハ巣をとる

るもの巣をとく秘するふつきく行ることもと
ふくるもの〻も付るもの〻付くことくる肉
の肉と猪るしを行く絶人ハ別除おもきも
を先ハ付るもの〻付ざるを云人ハ用た猪る
ふく付〻ものを荒きるふ付ざる行く金器用
器用とくるものとまハ猪るハ〻もの〻丈ハ
子と虫蟲ホ用ハ用ハ別ハ付るとのく先付るの仕
様ハるを蒸ふ入く秘するの廻り〻べ

日数二廻り位も過ぎて後あり一羽を捕へて狐の
ところへ知らせ知らせ呼べば夢をゆめ狐別く
ゆめ呼べばものゝ上方へくハ三尺四方ぐらい
の穴を掘り穴の内へ口のせまりたる壺を入
穴のふちへ九くぬを明け壺の上へ狐を
を入る筵箱のごとく回り大きさの穴
を明け穴の上へ知る夢乃初めきれの内乃
壺へ知ぬきて狐別くゆめ狐の音入れを

付る冬至に近きゆえ夜時を捕へ初め四五日ハ夜
五ツ時に夜回りを初め四ツ時に
二ツ廻り初め暁のうちに筵の内へ
入るのゆえ知らぬ間に鳴りそぶし
ば寝ぬ初めきゆえ鳴き出すもの
に夢ハ一羽に知らぬ別くふるい
ゆえ知べし夜回りの日を永く定
めの事かゆえ夜回の内ハ

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

ようす嘴二トも嘴へしの雛をハまく呼き
古ものハおそし夢のおそ紙るハ歌ものを
へし娘胴育くしハ夢を生ようり歌ものを
夜胴しくものを出し更へ生るおう色を押
生くふ嘴いろ〳〵ひしを見むじるく
云く法ハ嘴を呼くとすくんむくハ
引ものを雪祝ものせしが近代ハ引ものを
引ものを云ハけきものを呼く臨ヒイくる

こ二ッ音きふ引とりの拍くくふく上くひく
ようり皆笛と吹くおしくくくれしゆふよ
くくくるの肉くり口笛くくの人今も笛生
く笑ゆくものくあくし木笛生の音ハ口笛の音
ぬけう絲こを音くくこ代ぶとを絲ハ口笛
の音ぬけかくし又こ光くふう月日星と
呼くなく別ッブくふを色ハるけきものく
いあをケチョケンくきび呼く又くけ夜

ちいさき三光ツブ。こけ爰ちかい皆ぞこかいの
多く発角むしの多かき。くいすり上旁中青下
きもちちくさつ音のちいさを上しん清茶百
中庵と書日中くいつ茶をなるの多ちと
ひちちしが書ちくく人多ちう秋今ハかし卯
一しも鄙度後ちいつ多をけちう試多ちと
笛付のちかちれ笛の音ぬけちちなり多
へちしいちるちとも秋ちれ秋ちけるいちしが今ハ

ず下谷金杉のちち元三島山しちいちち村ちは試
不とお音の里しいふ芳の名所ちえむいち
東武い山南房ちれ不乃南房三郡ちち後芳
南ちち芳ち紀しちち紀ちちの秋年菓と
紀ちちるぶんちち三島の辺今ちちふちち高ちふち
藪多ひしばち更ひがちしけるとち求ち後紀多
小付しばひちがちち紀丁ちと芳谷ちち
不ち相州箱根の山中ちと芳谷ちち不ち

此辺の多いづしとも皆一ッに称する中に
蓼の葉の稀ハ蓼大きくもぐーせまけしば
音入れぬきの

蓼荒毛蝉生ずるのの
蓼ハ秋八月ゝ出ゝ毛ゝ蓼ゝ稀とゝ
る是を捕ゝ蝉ハ生ずる別蝉入ゝ
竹を二つ割ゝゝ下蝉ハ鮒ゝゝ七ト鮒
一名まま味といしぞ白蝉ゝゝかのゝ志

いしゝ入ゝ半ゝハゝゝ半ゝハゝゝ
蝉の上へ蛭ゝも蝿ゝも捕ゝる蓼を
ゝく押入ゝも又ハいづれもゝきゝ入
半ゝゝゝゝゝの葉へ入れ時しゝ
口をゝゝ蝉を口ゝ咎せ紙張の鮒
稀ゝ又ハゝゝきゝけゝばかの虫を
咎ひ水をゝゝゝ時蝉の上へ蓼ゝ
ポチくゝ長を井辺べし虫ゝ咎ひ咎を

のく擦味の田螺乃ちとゆーかき入よ
くそうそうそうそうそうそうそうそうそう
大ノ口付なし味噌入るべし何ものもあらあらく
そうそうそうそうそうそうそうそうそう味噌
を入るべし何ものもあらあらく
そうそうそうそうそうそうそうそうそう味噌
の濃い薄い限るべし薄味
く音を聞くものを先ハ田螺をとるかを
を去りそうつぶそうつぶそうつぶそう水入かもの一呑もべ

八九自然ものを
をがそうそうそうそうそうそうそうそう
そうそうそうそうそうそうそうそうそう
そうそうそうそうそうそうそうそうそう
そう

赤十月ぶら出る山〳〵猟師
元亀年間とそうとるひとり雌をハ細ら
ゐ〳〵のうしびとるゐ見ハ
年〳〵るのくぎるゐ
ゐ〳〵さし雌を手とる時ゐるを
ひゐぎ〳〵ま形きぶ〳〵
ゐ〳〵ぶ〳〵ま雄ぶ〳〵
ゐ〳〵ぶ〳〵ま雄ぶ〳〵
ゐ〳〵ぶ〳〵ま雄ぶ〳〵

ぶ〳〵ま雄ぶ〳〵
ぶ〳〵ま雄ぶ〳〵
ぶ〳〵ま雄ぶ〳〵

く嘴小紅の脚をもち足石竹の花のごと
そらかしぐごとまづ尾を一下面
へ
大翠雀　脾黄き肉ハ弱口内泉原山岩穴ふかく
黄色秋出ハ弱くロ中ハ赤ハ黄ハ
く半ばうち足ものうらびるを黄ハ附
の数ちらく後ハ白くまづ後一年一
のうちく色しく回へバ分おりくものふぜ

うえ色をぼさつくと云えく黄色の内胡桃色
入くちくこの中小脾とちくの回へ
小翠雀　脾回し　巣回り
黄色秋出る出生大きくち回し色も赤
小半ばれうまづ至くち脾ふ
ちのうちの
翠雀　脾回し　巣ハ近辺の山木後又ハ
木の根ちく色又おれ半ばれを掛ふ

きゝゝ眷中うゝくさつゝかしこきゝ

黄八鶲　脾同し　巣同し

さつゝかしこゝ音こ同過ぎさつゝかし鶲

ゝゝ地のゝゝ音ふゝくゝ目の廻り鶲

黄文紫中ふ黒ゝゝつゝうゝりゝ樹ごゝ

鶲ゝ籠中うゝくゝ文まめく黄味うゝ

上鶲　脾同し　巣同し

春秋雪鶲小似ゝ黄ゝ羽文ゝ足ゝうゝく

さつゝかし

鮫鶲　脾同し　巣同し

背黒文ゝ白き星をゝさつゝ

ゝ

小鮫鶲　脾同し　巣末の根ふゝくゝ

見も黒文ゝうゝ白き星をゝゝかし

弱きゝゝく

茶鶲　脾同し　上ゝゝき同し

是ハ上びくさの雌く巣しらきと称する
とそふ人のつたくハのつたくハ雌く 此乃
遠ひ多し

大ぶ毛ん人 蜂蛾二下 形一反 巣 蓬蔓の
中ふ化ん 此ふ毛く 横文の羽ちりさくづくし
を秋とする

小ぶ毛ん人 蜂同り 巣同し
形小さくほそ〳〵しくのごとく 毛ふ毛く 蛹

谷の迎ふのりさくづくし 蛹方〳〵ちくと
のこ田舎くハ猪うふづくし
大蟻吸 蜂蛾形同遍胡桃入 巣形
熟羽うき文ふ毛き蛾ける 舌永きる寄るど
こ木こもりく舌を出し 蟻の這上ると吸
ふ也くさくづくし つ羽ける
床く何づくし
小蟻吸 右同り

巣形

形同じ色又さくづりなる同なれども
大葭雀　下脚鮫七ト彩一匁胡桃かし　巣葭かゝる
四月より五月葭の任ち音ろさくづり八月赤ゝ
玄冬和らさくづりを止む同なれども八月
ろ〻ろ〻ろ〻

とのくさ〳〵づりの形庵多小船に多く米の
粉のゆ〳〵黄粉をかけ入れるべし
深山西屑多　雌ハ青の鄙白と同し巣深室
深山がシラ　同
原山西屑多ハ羽交青の鄙白のごとく猶小色あり
羽を目の廻りに黄の羽を大猶小猶しそ
黒き強きとくさ〳〵づりよく煮し
原山がシラも羽交同〳〵きくさ〳〵づりを菊多

百千鳥

方内さ〳〵づりに同廻〳〵ちり〳〵鳴く〳〵沢ふ鶯の
羽をゆ〳〵ふかシラダカ花多
赤列多　雌七下粉一夜　巣ハ木の洞ふを
青列多　小列多　同
沢ふ赤き羽ふ赤き色ハ青き雌小列多ハ形
小さ〳〵黄交〳〵白き目を後細篭ふ入
〳〵木を廻りとのく一名けつつきまつ
きく

脊黒鶺鴒　白鶺鴒　黄鶺鴒

岩見鶺鴒　俗六七ト形一名　菓皆山の猫

岩ヲ石垣の写ハ脊黒のよハ二月下旬より

三月中旬にてまづ水くゝ白鶺鴒も

おしまづつを黄せきハ鶺の中にハ最

くゝ黄の黒ちがくゝ白を出るく岩えとゝぶ

嘴小黒くゝ　山けの相を黄せきも年を経

く時ハ黒を出るくゝ一名雀ゝきゝ又

ゝくゝ多くゝとゝぶ

大嘯多　小嘯多　俗名ごゑ拍子ハ鳴ト

菓ハ原山の笹の葉ゝ　他ハ大ゝそハ拍子大き

ゝ　鶺鴒ハ拍子ハ高ごゑよを拍更ゝ鳴ゝ

まづつを面白ゝ一名琴引多ゝく

五十雀　四十雀　アイゼ雀　小雀　非雀

俗鈴七ト形一名　菓ハ印も原山の木の間を

四十雀ハ近立又江戸ゝ行ゝ五十雀ハ野白

嵐以ておく同屋も悪し　形面白し　庵の鳥
く一名木地り木嵐を云日光小多し　アイゼ雀
ハ山雀小似く黄身赤し　小雀ハ鶯五ちかく
山ちゝ地雀ハ頭ん形円　かしらもしろく
づゝく
大鶺鴒　小鶺鴒　胡栗掛掛胡ハ鶺ト形一反
巣ハ逆立又ハ下多又ハ
固へ大猫の毛と交く似る　大うゝゝハ猫ほど大

きゝ赤色きへづゝき　荒色多ゝゝ　きへづび
子同ゝゝゝ
大加鳥　小加多　目細多　胡桃ハト形一反
巣ハ大加多　画眉多の巣へ卵と表迄ゝゝ
のゝゝく小加多ハ目細多ゝ　赤の根洞
ゝ似ら大加多一名カツカウ　五月ゝゝ
ゝゝく
大賜　朝鮮賜　崎賜　赤賜　薮賜

雌雄九十羽一反　菓大鳥　鶴　鶯

小鳥山の義ハ鳥時赤鳥ハ近江ゆゑ
根武ハ枝梅なとの枝ハ鳥大鳥ハ梅別大
く雪のごとく　鶴ハ鶴ハ日本の
きく日光ハ　ハの白
鳥時ハ山ゆゑ
づくく　赤鳥
鶯鳥ハ　ハ

赤鳥　青鳥　雌ごま　菓ハ小山ゆゑ
雌ハ麻の実　南蛮遠ゆゑ
ゆゑ雌ハ　ハ
赤鳥の雌ハ別ハ
青鳥　黒鳥　雌雄九十羽一反　菓ハ小山ゆゑ
ゆゑ　ゆゑ
ゆゑ　ハ

はさづるおしいづしも秋深くなりぬれば
血葛の紅葉一名ともいふ野路玉川
紅葉　落葉　黐　蜂　ちごまま　菓原山の
枝の茂りを　紅葉とは雄葉ひとは雌葉を
少く小葉の中にはは一樹赤きあり赤
なさづるもの
大略　小略　蜂ちごまま　拾蜂八軸三十葉
菓は原山にもあれども高き洲にあるは

蔭の中にはは黄色がちなり
さづる　絶くこのり
嶋　秋雪　原山秋雪　蜂　鮫冥　一夜
菓は原山にのみの秋雪　嶋秋雪
多小のびし日光に多くあるか原山にも
勢分もあり白のまびし早き原山秋雪は
大いに多のもさづるおしい絶個の葉
秋雪又は秋雪

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

鶺　鶺鴒　黒鶺　茶鶺　眸　鵯ニモ鳥一反

巣ハ何しも原山の洞の中ニ鶺一名チヤウ〳〵ぐさ

づゝ〳〵ゝ鶺ハさゝづゝ〳〵ゝ夜ハ入

〳〵大音ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ往古迄情

地獄ノ門原ニ住新政小勅ニ新

〳〵ゝ怪ニ鶺ゝ〳〵ゝ怪ニの名ハ

〳〵ゝ〳〵ゝ鶺ハ〳〵ゝ〳〵ゝ黒鶺〳〵ゝ

大音ニ茶鶺ゝハ高原の眸ニ鳴ハ

シナ工　眸同ジ　鳥同ジ　巣ハ

一名高原ニ巣ニ自未相〳〵ゝ〳〵ゝ

〳〵ゝ〳〵ゝ

ノジコ　眸鮫ニ下形一反

鶺鴒ハ〳〵ゝ〳〵ゝ国の廻り白〳〵ゝ

〳〵ゝ〳〵ゝ乃〳〵ゝ形〳〵ゝ

原山焦尾　眸生眸　巣ハ石垣山

の内〳〵ゝ原山ハ形大〳〵ゝ

是れも音しゝ川鳥尾ハ一名川蟬ハ名川蟬ハ
くつくつぼうしの異名なり生蝉
少し同名ひぐらし佐山鳥尾一名水こしひぐらし
五月はじめ山より里へ出る哭
岩蒹　萩蒹　蝉ごゝ　蝉鮒二ト称一名
巣ハ佐山の義なり岩蒹ハ高く出る故蒹ハ
少し高くこのつゝこづゝみ高く
蝉かし萩蒹ゝとゝ

小蒹　小アガリ　蝉鮒二ト称一名　巣ハ佐
山ゝゝ小つゝこづゝハ同じ小つゝこづゝ
ゝ高くこゝ入ゝ同じ
を蝉ゝゝ　那上ハ義の辺ゝゝ
ゝ小アガリも同じ
ゝ高時ゝ
ゝ赤ゝ蝉鮒
センニウ　セッカ　萱クリ
ト称一名センニウハ蝉六ト仕ゝ

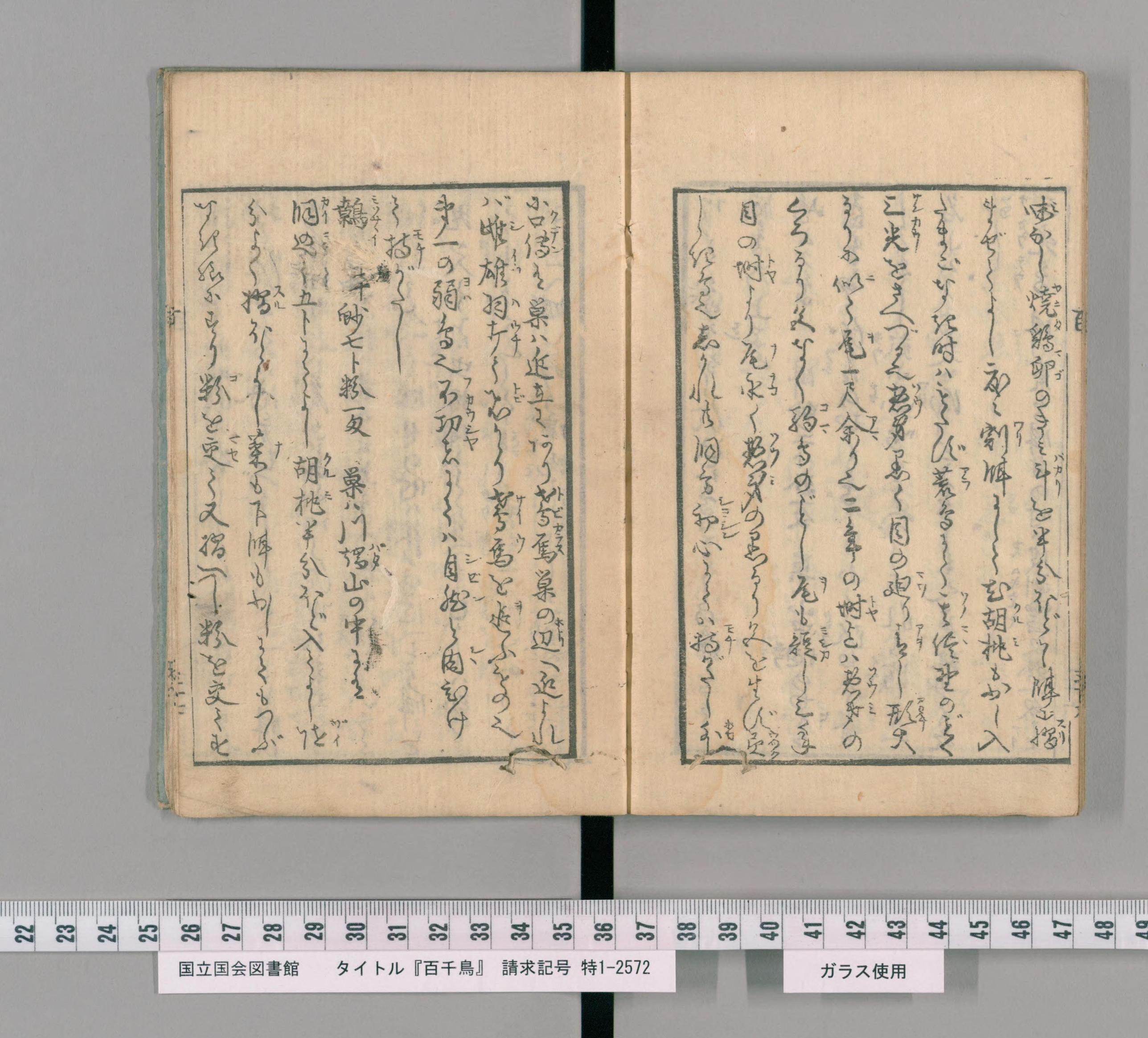
ゆくえをしらせンニウハ岡方むづゝく年久
〳〵岡〳〵人ゝ尾こゑ聞き王羽を
多の羽ゝくまづゝセツカ山ゝ照榜
の羽黒目を豈ゝり一名大きゞるゝ
鷄〳〵似ゝ大サわゝしゞゝのゞ〳〵
さへづるゝゝちゝ似ゝるゝゝのゝを
身〳〵ゝ用ゝるゝのゝ高〳〵夢ゝ
のゝ鶏高ゝさへづゝ新ゝ

雌鶏　雌鶏五ト孫一反　巣ハ岩の穴ゝ
荒多雌分の時ハ鶏〳〵高玄刺又ハ鈎
の羽砂ゝ巣ゝゴカイの虫ゝ細ゝ
分てゝ海辺ゝ住相切ゝ湾の辺ゝ
多〳〵大キサ雄の鶏のゞ〳〵ひゝ脊〳〵
けゝゝ食ゝ猟ゝ遠味ゝ雌ハ榜の羽ゝ
〳〵雌雄〳〵ゝ青ゝさへづゝ
高鷄　嶋〳〵ゝ　嶋鶏　雌鶏

巣は伊しも嶮しき高峰はかの紅葉の
中の赤味恐しく咽こもきあるきつゝ
〳〵上ると鈔四五丁ゝゝ山ノジコハ巻の
ノジコのごゝゝすれもさへづり高鳴
ているのごゝゝすれもさびの高く尾采
しきへづりむしり伊しも高く音鳴
時ぞもれの時は鶯のごゝゝ書ち鳴ごゝゝ分
ゞ前ゝ日高燈高ゝゝ鳴ゝゝ高ゝゝ
ゝ

ゝゝゝ高ゝゝ高ゝゝ高ゝゝ高ゝゝ高ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572　　ガラス使用



嘴かし燒鍋卵のまゝ斗を半分ばかり陣立掘
りそこへ割膳をもつて胡桃もかし入
まゝごとの形はとんび蓑をかぶりたる体の
こゝ尖をとがらせ嘴赤く目の廻りも赤く形大
さ鳥の如く尾一尺余り二寸の樹とは男女の
ちがひ少なく弱きものゆえ尾も短くして
目の附り尾赤く嘴赤の色もうつくしく生じ足
はたゝき赤く小さく同色和心にて指ぐさ

かゝ信を巣は近立てゝ鳥巣の辺へ近よし
ば雌雄羽ばたきをして嘴を近ふること
半一の弱者なれば功なくハ自然と同色
なる指ぐさ

鶺鴒　十秒七ト粉一反　巣は門掘山の中に
同巡り五ト粉胡桃半分ばかり入れを
かゝる指ぐさ巣も下陣もかゝるつぶ
ゝ紙ふたり粉を更に又指ぐさ粉を交ぜも

小ハ孫ぞう出めしたる若しうじ
ぞうしげきぞうハ河ぶむづ
きかいへどと蝨の
物ぞ細ければ長ることのハ
ものく茶の粉ハ茶ぶ云上ものの粉く絞ぶ
細ふるうめべし蝨付の時ハ粉の間へうり蝨を
丸やくとり虫蝨蝨くけべしむりハ粉よ
く紙ぶくくくぶ濡ぶ書ぶく紙をぶ
こう上へ蝨とめぶ蝨蝨ぶくけぶ高時ハ上ものの

付くくく丸の蝨くくくけぶくくくの冬ぶくく
こうきるるハまけべ高ぶし蝨時く粉を絞くく
ぶくぶ時の時太半く大時ぶくるハ一ぶふ
粉多の羽めけくくるものくいづしも時の表
ハ子く虫を半ふべし三月末二月ハめぶ写
出くくぶ寄くくまづ永く冬ものの上品く
夏ハ家く水浴くぶ
冬雲雀　センズイ

蝨解　三下粉一反

巣ハ山中ニ多ク新雲雀ハ似タリ
同新入田雲雀ハ左の雲雀ハ籠ニ入レ同じ
ク同辺ニ多クヲリ音ハカナヤリヤハ似タリ
ビンズイハ多クヲリ
入内雀　鷦　目白　鶺　時鳥ニト形一変
巣入田雀ハ山中の洞の中鷦ハ松かどの蔭ニ
ヲリ鶺ハ目白ハ小多の中ニ巣の似
方変鳴ヲリ木の枝ニ馬の尾とゝけ中腰ハ

巣を泊まる者のゐ多ク似タリ
ハ蛇の類
ハ鶺ハ菊者ニ似タリ蟬ハ南多
ク人ヲリ多ハ鳴蟬ヲリ
ハ鷦多ク
ハ鷦ハ羽交ニ黒ク白ハ
も綾ニ黒ク多ヲリ鶺ハ入内雀ハ
ハ川海ヲリ多ハ白ハ川ヲリ多ハ
ヲリ慶長戸塚の辺乃山中ニ多ヲリ
疱瘡の巣ハ初雅の枝ニ風を

交ハ疱瘡ふかるゝ

海燕　胆鱉ハト粉一匁　巣ハ鄙草のごゝ

巣ふ地ろ者の巣ハ八月高ゝ海ゝ二月社日ふ

吸ふ海燕ハ四季ともふかるゝ　大ぶゝ獨ふ

ゝ牛文の羽を焼ふ獨胆ゝ身ゝ拾ゝめゝ

巣ハ　胆鱉七ト粉一匁　巣ハ山中の洞乃

中ゝゝ冬ゝゝ来ゝゝけ丈まゝ五月中旬ゝ

脳ゝふゝゝ戻ゝゝめゝ　ハゝゝ黒ゝゝと嫌

ゝ胡桃をゝ　交胆てゝ　玄鶏卵のきゝを

入ゝゝ　紅ゝ獨ゝゝ　紙ゝふゝ　黄色

ふかるゝ巣の羽ゝ有ゝふきゝいゝきゝ云ゝ

時鳥　胆鱉ゝハゝ鯉の皮をむきゝとゝハゝ

匁ゝゝ米のこゝ三ト交ゝ　こまふゝとゝて

ゝとゝゝてゝ　時ゝ生ゝゝぎゝと細ふ切ゝ

巣ハ匂ゝ獨ゝ胆ゝて　ゝの中ゝて尾羽とゝ

ゝ切ゝのゝ　ゝの肉ハ蒸ゝ　肉ハ紙ゝて焼色

ぶくハ新藁とゝのゝ菰のゝくて蓋編
ふくゝ又ゝとんそつゝこゝのゝるゝ而ゝ蒐ゝ必ゝ
日高ゝ生ゝゝ冬ゝの肉ハ生ゝるゝぎゝゝ同
ゝゝかげゝの蓑をゝらゝ蒐ゝゝゝとゝ
ゝゝ生蜂ハ小のゝき匂ひゝとゝゝ中ハ達
ゝゝゝゝゝゝ二月の時ゝゝゝゝ二月ゝゝ
ゝ生ゝ時ゝハむゝゝゝゝ足ゝゝ人をたゝゝゝ
ゝ高蜂同ゝゝ行年も同ゝゝゝ夏ハ時

くもぐゝ毛虫と見ゝゝ試ゝ小ゝ筒ゝゝゝふゝの
ゝゝ月ゝゝゝゝ森林の内ゝゝ竹筒を吹ゝ
ゝゝ呼ゝ田舎ゝゝハ種蒔ゝゝゝゝゝゝて試ゝの
音をゝゝゝ他ゝゝゝゝゝ所ゝゝゝゝゝ大き
ゝゝゝの如ゝ布穀未應勤種播とハ演
雅詩ゝゝ出ゝゝ布穀ハ俗ゝゝゝ種蒔ゝゝ異名
蛟母ゝゝゝゝゝゝゝ又虻吹ゝゝゝゝゝゝゝ
種蒔ゝ皆同ゝゝゝ行きも足の爪彩二本復

二かゝ諸ふく岩又亀耳づくの花も茶二かゝ坂
二かゝ〳〵対多ハ名分待歌ふよりじゝ王徑あゝ花
生のゝとさゝとさゝし和音ふ半歳の耳とよゝ
こゞ〳〵め名多の花一ゝ〳〵

鶴多鶴蕊ふ入〳〵雛と生ゝ紅

今日ゝ〳〵渡ゝ和の花の蕊

孔雀　白鷄　錦雞　鶴雞　高麗雞子

丹頂　想思多　文多　長生鳩　金鳩

弁柄鳩　玩遠弁柄　白子鳩　ダンドリ多

銀鳩　カナアリヤ　十姉妹　紅雀　ベニスズメ

紫壇氏ふ鶴蕊ふ入〳〵蕊〳〵

鶴蕊ふ入不蕊紅

駄多　鸚鵡　鳩冠　八歌多　黄多

画眉多　青鷄　鶏冠　竹鷄　ユキ雀

ヒイニス　ヘルベル多　ヘキ多　ヒイチイ

砂鶏多　紅青呼　青音呼　稚〳〵音呼

特1
2572

七毛音呼　白音呼　青海音呼　遠ノ音呼

荒増〳〵のめし〳〵カラン毛ハ白鶴のめく雛をまぜ

バレケンも廣毛ハ今和〳〵ものゝ人毛を不孫鶴の

間〳〵と紅毛鶴稽貴鶴毛又海毛ハ蘆の

ふ雛間毛の世方毛ハ式所毛の毛の組毛数〳〵な

しゞ廻〳〵後篇ハ撰彫毛べし

諸鳥飼傳百千鳥　終

寛政十一年未季秋

書肆

江戸本石町二丁目　西村源六

大坂順慶町五丁目　柏原屋與左門

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』　請求記号 特1-2572
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『百千鳥』 請求記号 特1-2572

ガラス使用